

親鸞教学の課題

——学生会員の批判と反省——

司会

松井 憲一

出席者

小笠原 慈孝

神戸 和磨

太藤 順誼

竹園

高松 信

辻 俊

広沢 憲

高田 隆

高島 成

関

英

明

隆

英

中

「親鸞教学」の意味するもの

松井 今日、「論文」の口頭試問、

ご苦労でした、まあ、これで私たちは、学校に残って勉強するにしろ、郷里に帰って直ちに寺院の仕事をするにしろ、あるいは就職するにしろ、一応、区切りをつけたわけです。

それで、私たちが、宗門大学に学んだ

という立場から、今までお互に、語り合ってきた問題を、この機会にだしていただいて、話しを進めていただきたいと思います。

広沢 今、宗門大学ということができた

けれど、真宗学会から、以前に「聞思」という機関誌がでていましたが、一昨年から「親鸞教学」と改題して刊行されることになりましたね。では、一体「親鸞教学」と改題して、何をいおうとしたの

でしょう。真宗学を「親鸞教学」といって、それで問題はないのですかね。

辻 真宗学会の機関誌「聞思」を「親鸞教学」と改題して刊行された意義。

それについて、僕は、一応、公開性というところが意図されたのだと思います。しかし、この「親鸞教学」と特に表立ってだされたのは、新しいことかも知れませんが、親鸞教というような言葉の使い方、以前からあったのではないですか。

金子先生にも「親鸞教の研究」という著作がありますしね。

神戸 しかし、その場合、親鸞教というのと、親鸞教学というのと意味が同じかどうか、学の一字があるかないかで、意味がちがってくるのではないかと、ことも考えねばならぬでしょう。

太藤 日蓮宗では、日蓮教学といいますが、もっとも、日蓮という人の名をもって宗旨の名としているんだから、あれはあれでいいのでしょうか。日蓮宗のように人の名をもって宗をあらわす場合と、禅なら禅というような、行についた場合がある。それにたいして「浄土真宗」とこういうのだから、それを直ちに親鸞といいかえていいものかどうか。そこには問題があると思えますね。

高畠 そういえば、「現代しんらん講座」という本には、ある人を評して、親鸞学者のホープであるというように書いてありましたね。

竹園 一般には、浄土真宗何々派というとか葬式や法事のことか思いだされるといふことがあるから、そういういい方を

するのもかも知れんが、しかし、僕は、親鸞学者という言葉には低抗を感じるな。

広沢 われわれが親鸞という場合、そこには、おのずから人と、そして法の問題があるのでしよう。親鸞という言葉のなかに、人のみでなく、法という意味も考えられねばならぬ。ところが、一般に親鸞といわれる場合には、人間親鸞という意味が強い。だから、そこから親鸞教というものはでてこないのではないのでしょうか。例えば、吉川英治氏が「私は親鸞さんと身近に呼べます」というように何か愛欲というようなところで、現実の平凡な人間生活のところに親鸞を置くことだけで、理解していくという傾向が、一般化している。

小笠原 特に、ジャーナリストや小説家などは、全部、愛欲というようなところで、親鸞をとりあげているといってもいいすぎじゃないと思う。

広沢 そうすると、親鸞の教えを「親鸞」とよぶことよって、何か一般の偉人と同じだという平行感覚で聖人をみていこうということになりますね。そのか

ぎり、われわれの生命の根というか、われわれを成り立たしめるという意味で、親鸞をみていくということ、つまり人の上に法をみていくということが、なくなっていく。

辻 昭和三十六年の親鸞聖人の御遠忌の時、東本願寺から出された出版物などをみると、宗祖聖人というと宗派内の呼び名で、外部への呼びかけの出版では、大体、親鸞聖人というように使われていますね。

高松 そういう面では、宗祖というのも親鸞というのも、言おうとしていることは同じことなのでしょう。しかし、それと同じ理由で、真宗学を「親鸞教学」としたのなら、言葉の置きかえであってどうも不徹底だと思われまますね。

だから「親鸞教学」には、親鸞教学といわねばならない意味が何かあるのだからし、また、なければならぬ。

小笠原 そこには時代を考えるということがあるのではないのでしょうか。現実社会に生きていく自分の上に、親鸞の教えの意義をみだしていこうというよう

な！

広沢 君は時代を考えるというが、僕はどうもそうは思えないね。さきほどから話がでていることだが、大衆から足を引っぱられるというか、時代への妥協があるように思われるんだ。

高昌 いちがいに、そうだと決めてしまいうこともできません。仏教の歴史の中で、もっと広く大きくいえば世界の歴史の中で「親鸞」という名で指示されているものはなにか。それをいいあてようという願いが、この「親鸞教学」という題になってあらわれていると理解すべきじゃないですか。だから、ただ「親鸞」ではなくて「親鸞教学」なんです。

広沢 一号の批判が二号にできてしまったね。あれによると、親鸞の教えに造詣の深い某大学の学者ですら、やはり学術雑誌であってむつかしい。よくわかるのは曾我先生と金子先生の書かれたものだけだ、という批判があった。

そうすると親鸞教学は、公開性・時代性を意図されたといっても、読めるのは

谷大の卒業生が在學生、それも読み切るという点になると、あまりあてにならないのではないか。

高昌 しかし、三号の清沢先生の特集号などは、そももいえないのではないですか。

広沢 いや、あの清沢先生の特集号でも、ネームバリューで持っているのであって、例えば鈴木先生や正親先生や西谷先生のがよかったという世評がある。それに、安田先生のものは、むつかしいけれども興味深いという声がある。反面、それだけに批判の声もあることになる。

辻 そういう意味では、前の機関誌「聞思」から「親鸞教学」に変わってきた方向づけを、もっと明確にしなければなりませんね。本当は、学生会員を母体とする真宗学会であるはずなのに、そういうことが学生の間に充分徹底しているとはいえないし、いい意味でのPRもまだまだゆきとどいていない。

竹園 学生会員を含めて、千人ほどの講読会員があると聞いていますが、何と

会員なんですから、どんどん発言して、学生の声の反映した雑誌にしてほしいですね。

松井 ところで「親鸞教学」にのせる座談会が「親鸞教学」の批判からはじまってしまう。「聞思」でも「真宗学」でもなくて「親鸞教学」でなければならぬということが、まだ不徹底のままです。しかし、時代の問題、大衆の問題を内にかかえた研究誌とはどういうものであるか。「親鸞教学」の主体性はどこにしなければならぬのか。そういうことを学生の立場から、大いに考えてみなければなりません。が、それは今後の課題として残すことにして、話をすすめることにしましょう。

思想家親鸞と宗教家親鸞

松井 さきほど、真宗の教団内にむかっているよび名は宗祖であって、宗門外へのよび名は親鸞といているというお話でしたが、それについてはどうなのでしょう。

高昌 親鸞という言葉のひびきは、や

はり人間親鸞という見方でしよう。しかし、宗祖というような、ただ人にましまさずという感覚がないと、宗教でなくなるのではないですか。

高松 しかし、歴史上の親鸞はあくまで人間なのだから、そういうとらえ方をしなければ、いけないと思う。

高島 それでは、宗祖というか、教徒からの親鸞は、どういう意味を持っているのでしょうか。

高松 一般に、親鸞といえば、一人の人間の生き方というような、思想家か、偉人の生き方の一例にすぎない、というように受けとられるのではないですか。

ところが、宗祖という場合は、ある生き方ではなしに、そこにはみんなの生き方がある。そして、そこに、わたしの本当の生き方があるということが語られている。そういうところに、教徒としての親鸞があるのでしよう。

神戸 親鸞の流れを汲むわれわれにとっては、親鸞の存在というものが、わたしの存在を成り立たしめるというか、わたしの存在を基礎づけるような意味をも

つものとしてあるわけで、そこに宗祖というよび名もでてくるのでしよう。けれども、世間では、そのように理解しているかどうか。今日では、親鸞をただ人でないとみる人は、ある特殊な人、たとえば田舎の信仰の深い人だけだといってもいいんじゃないですか。

竹園 つまり、現代では、親鸞を思想家家としてみる人は多いけれども、宗教家として、すなわち宗祖としてみる人は少ないというわけですか。

高田 そうだと早急にきめてかかるわけにはゆかぬと思う。ただ人ではないというこの意味が問題だが。

高島 歎異抄の解説書で、最近、一番よく売れているのは、教養文庫の本だと聞きました。親鸞に関心を持つ、歎異抄を読むといっても、教養の一部としてみる人が多いのではないですか。

辻 それは、あると思う。しかし、そこから親鸞ブームが起きたということはそれまでただ人におわしませずという面だけ特に強調されて、われわれとかけはなれて、遠いところに親鸞を仰いでいた

のが、親鸞も、われわれと同じ底辺で悩んでいたのだということから、ただ人におわしませずという中に、同時に最も人間的な問題が、一生の間、死ぬまで考えられていたのだということにたいする共感といったようなものがあるといえると思う。

だから、親鸞ブームというところ、一応、人間親鸞、愛欲に悩む親鸞というところ、そこで多く語られるようだけれど、そこには、そういうようなものと一緒に、宗教家親鸞というか、念仏に生きた人というものを大前提としてみているものがあるのではないだろうか。そうでなかったら、特に親鸞ブームなど起りようがないだろう。

高松 しかし、親鸞ブームは、やはり思想家親鸞という見方だと思えますね。今度の高等学校の倫理社会の教科書も、親鸞は他の偉人と同じように、特異な人とみるだけです。一応、内容は、他力とか、本願と書いてあっても、ある人間の一つの生き方としての参考意見ですからね。あれが、今度、大きく一般化される

わけです。

広沢 まあ、ひいきみにみれば、親鸞は宗門外の人へも一般化されるものをもっているという見方も成り立ちますがね。

高松 それだけに、偉人親鸞、思想家親鸞という面が強くうちだされて、それで終ってしまう見方が多くなり、遂に、宗教学家親鸞という見方はなくなっていくのではないかと思います。

神戸 そういえば、坊さんは嫌いでも歎異抄は読む、というように、人間親鸞として、思想だけをとらえようとする人は、宗門を否定する人が多いですね。そして、そういうように、思想家親鸞とみる人たちの意見が、ほとんど大衆の中へ入っていくのです。だから、私たちは、そういう見方にたいして、親鸞の姿はこれですといえるものを、もたなければなりませんね。それが「親鸞教学」というか、谷大の真宗学の意味なのでしょう。

高田 たしかに、われわれは、親鸞という宗教的人間像を、われわれ自身の上には、はっきりさせねばならない。それは

一生かかってやってゆく仕事だといってもいいのでしょうか。

高島 僕は、親鸞が今日の時代の大家に理解されるという意味では、思想家なら思想家として、純粋に評価されることもよいことだと思うな。

高松 それはそうだが、われわれも思想家親鸞という理解に終るのであったら谷大で学んだという意味がないことになるだろう。

広沢 経典は十方衆生と、全人類に呼びかけているのだから、親鸞を理解することは、初めから、門徒とか親鸞教徒というように限定されるのではないことは勿論だが、その教えは、一人の自覚の上のみ成就するものだろう。だから、単なる思想家親鸞というだけでは、一人の自覚とならないから、それだけのことならいかに大衆化されて多くの人に知られても、それは知識として知られるだけで、われわれの根源的なエネルギーとならないから、意味がないということになる。

竹園 要するに、大衆性という意味では、次第に思想家親鸞という見方が多く

なってきた。しかし、それでは本当に親鸞の教えを聞いたことにはならない。そこには、単なる人間親鸞ではなくして、ただ人にましますというような意味を明らかにしなければならぬ。人の上に法をみる、だから、その人は、私にとってかけがえない人であるというような、宗教学家親鸞というか、つまり宗祖親鸞という見方がなくてはならないということですね。

辻 親鸞について、世の人がどのようにみているか。それを詮索すれば、いろいろいことができるでしょう。けれども、親鸞ブームの基にあるものを、人間親鸞に親しむからだとか、思想家親鸞として受けとられているのだとかいうだけでは、皮相の見というものではないですか。理由が何であるにしろ、やっぱり親鸞が注目されているという事実がある。

とすれば、歎異抄がどのように読まれているにしても、そこには、読んで何かを明らかにしたいという願いがはたらいているのではないか。その願いの声を聞く耳というか、あるいは、そこまで見と

おすことのできる目というか、われわれはそういうものを、身につけるといふ姿勢をとらないと、発言したことが世の中に流されて、消えていってしまうのじゃないですか。

松井 いまの話から、わたしたちの学問の態度というものが、当然問題になってくると思います。その点について、少し話しあってみることにしましょう。

学問の態度について

高松 それについて、われわれの歩む道は、親鸞の教え以外にはないのだということを、まず自分に徹底すること。そして、これがすべての人の聞かねばならぬ教えだということを確認にすること。それがなければ、親鸞教学というか、仏教に学ぶ意義がはっきりしないということになります。

神戸 そのとおりだと思う。それにちがいはないけれども、そうせっかちに大上段にふりかぶらないで、もっとじっくり考えることにしてはどうです。

高昌 では、教学というのは、一体、

何か。

広沢 教学というのだから、文字どおりまず教えがある。学というのは、その後につく。そういう意味では、教えられるというか、学ぶことが学ぶ人間を廻転するようなものでなければ、教学にはならないということがあると思う。

高昌 その、人間を廻転するということは――。

広沢 言葉が不十分だが、学ぶ人間が学ぶことによって、量的に変わるのでなく、質的に変革されるようなもの、というか、人間に廻心を与えるようなもの、というか――。

高田 なかなか面倒なようだが、要するに仏教を学ぶというところが、ただ知的興味を満足させるためや教養を求めるというようなことであってはならぬということなんですね。もし、そうなら、谷大は、全くつぶしのきかない学校になるということですか。

神戸 われわれが谷大に入ってから、たびたび聞くことだが、やっぱり初代学長の清沢先生が、開校式に「われわれが

信奉する本願他力の宗教に基づいて、われわれにおいて、最大事件であるところの自己の信念の確立ということ、そしてその信仰を他に伝える」といわれた。これが、われわれの学問の最初であり、また最後の問題でもある。

広沢 そうそう、なにか人を動かすようなものが内になれば、いくらありがたいといっても、それは教養の一部になってしまふ。教養ならとくに仏教を学ぶとかぎる必要はないし、ある意味では、もっと他のものを勉強した方が、趣味も教養も広いインテリゲンチャーになれる。しかも、それがパンの種にもなる。

小笠原 林田茂雄氏なんかは、真宗学を教条主義だといって批判する。そういうられる問題については、われわれもよく考えてみるということは大切だと思うがしかし、人はパンのみにて生きるには非ずということ、教えなのだから――。

だから教えられるということ、教えを聞くということ、それを抜きにして論議しても教えの語るところは明らかにはなりませんね。

竹園 結局、仏教の学問は、仏の教えが自分のエネルギーとならないとだめだということ。

高田 そういう意味では、谷大の教育の方法にも問題はありますね。

例えば専攻の場合でも、自分の希望した教授につけないというようなことがある。これからひとつおおいにやろうとして指導教授を選んでも、そこへ行けないということがある。それが、自分の成績が悪いからとか、履修した単位数が少なからというなら、僕らの不徳のいたすところだとあきらめもつきますが、そういう理由でもない。大学や、大学院で何かを専門的に学ぼうというのですから、指導教授を選ぶ自由があって当然じゃないか。そういう点では、大学というところは学生の意向を考慮に入れてくれるべきだと思います。そうでないと、学問への情熱までそがれることになる。

広沢 そういえば試験などにも問題はありませんね。あれはたしか一回生の時の真宗学だったと思うが。親鸞の著作名を挙げよとか、真宗十派の名を書けとい

うような、まるで人間の問題ではないようなものが多く出ていました。あの頃、こんなことなら高校の歴史の方がもっと面白いし、もっと有意義だと思ったのをいまでも忘れないでいる。

高松 仏教学なら、六波羅密を書けと！。それでは問題があまりにも平面的すぎると思う。たしかに、仏教学・真宗学もABCを覚えるということがまず必要だということはあるが、それは少くとも仏教学・真宗学の問題とはならぬ。あの頃は、はっきりしなかったけれども、いまから考えると、覚えたものが答えとなるような問題は教学の問題とはいえない、といえると思います。

小笠原 たしかに、そうだな。この頃の学生は、自分の言葉を使わないようになってきたといわれるが、そこには、暗記やつめ込みで、そういうふうに教育されているという問題があると思う。だから論文の時に困るのだ。

論文に困るのはわれわれの責任だけれども、どうもそれだけではすまされぬ問題も残る。ただものを覚え込むのでなし

に、自分の言葉で考えなければならぬような、そういう教育！。

先生は、われわれの論文を評して、昔の学生のレポート並みだといって批判される。そういう批評にかえす言葉はないわけだが、しかし、ただ、その批評を甘受しておれないという気持もはたらくのですね。そこにも、もう一つ問題があると思います。

太藤 清沢先生に或る英人が、学校の方針を尋ねた時に、先生は「一生考える人をつくらな」と答えられたと聞きますが、卒業にあたって考えさせられる言葉になりました。

広沢 それで、僕はやはり自分の言葉で親鸞が語れるというように、勉強しなければならぬと思う。曾我先生の言葉で失礼ですが「清沢先生は生きている。どこに生きているかといえば、本能の中に生きている」といわれたようにね。

松井 さきほど、わたしたちは、親鸞を思想家とみる大衆は、親鸞の思想を教養として求めているだけではないかと批判しましたが、それは同時に、たとえ宗

祖と呼んでも、呼んだこと全体が教養としての宗祖になってはいないか、ということ、問題がわたしたちのところへ帰ってきたわけです。

では話を今後の課題というか、これからの方向や決意というようなことについて進めていってください。

私たちの課題

広沢 僕は、これで家に帰り、寺院の生活をするわけですが、そこでどうするかという問題ですね。

太藤 僕は谷大へ来て、本当に喜んで寺院に帰れるようになりたかった。

高畠 ところが喜んで帰れない。

太藤 そう。寺院に帰ったら、しばらくは副職として、学校の先生でもするかというようにね。

広沢 でも、あまり喜んで帰るといふことも、有頂天といふこともあるから――喜んで帰れないといふことを、じっとみつめるのが大事だと思うね。

神戸 それはそうですね。喜んで帰りたいといふことと、喜んで帰れるといふ

こととはちょっと違いますね。どうして帰るについて喜んで帰らねばならぬのか。そういう問題もあるのではないですか。

高畠 しかし、何をしても、結局は一緒なのでしょう。

辻 それはそうだが、自分はこの道を行くのだ、ということが明確になつていないと、何をしても一緒だといっても、それは現実を逃避したことになる。何でもというところへ自分が消えていくからね。

高松 ただどんな仕事をしていても、そのこと自体に意義を見出す目が開けている、ということが大切なのだろう。

広沢 しかし、意義があるといっても効果を期待しての意義ではだめだ。誰れも認めてくれなくても、そこに自分は安住していけるというものが無いといけないと思う。そういう意味では、現実の中で自分を確かめていくという以外にないのだろう。

竹園 たしかに、仏法を聞く人が少ないとか、教化の実があらぬといふことは、僕らの反省としては大切だが、それ

で勇気がなくなるといふようなことではだめですね。

太藤 しかし、夏休みなどに寺院に帰って見るとわかるが、大体、仏法の話しをすると相手はむこうを向くし、世間話しをすると皆んな寄ってくるものね。

広沢 そうそう。その時、僕は身に衣(ころも)もつけているわけだ。それで、身につけている衣に相応した話しをするとむこうを向くし、衣にあらざる話しをすると相手ができる。つまり、自己にあらざる姿で、みんなと通じる世界がみいだけ、自己の姿に帰ると相手が無い。そういう意味では、僕らは一人だよ。だから、その一人のところ、本当に立っていけるかどうかということになるね。

高松 そんな時は、経典を読む。

神戸 本当に経典が読めればいいですがね。大体、僕らが経典を読んできた時

はもっと精神状態の良い時なのだろう。問題のないお家安泰のような時に経典を読んできたのだから、本当に経典に聞くということになると大変なことだと思

ますね。

しかし、いまも誰かがいったように、一人の問題が解決されないかぎり、すべての問題は解決されないのだから、結局自分がとっ組むことだけが残る。

広沢 僕は以前に、いま話題になったような着ている衣にふさわしくない話をする人と人に通ずる、そういうような自己疎外の形で、皆などと通じる世界がみいだされるといふような話しを、谷大の仲間ですしていたことがある。そうしたら、同じ下宿の立命大の学生が、そばで聞いていて、後で、われわれにはわれわれの悩みがある、あの話しは僕らにも通じるとだと語っていた。

だから、いろいろの問題はあると思うが、僕らの状態を自己疎外という点でおさえれば、現在の社会状態の中でも、普遍性を持っていることがらだといえると思う。だから、この問題は、人々に共通している問題としてあるわけだから、僕ら自身の問題を解決することが、現実の社会の問題に答えるということにつながる。っているのだから。

小笠原 親鸞をとりあげて一般の人々は、東国生活における親鸞の活動というものもを重大視しているが、僕らも郷里へ帰るといふ意味では、あの東国の親鸞の活動に教えられるものが多くある。

辻 そうですね。親鸞には一生涯、法然の下での五年間の聞法生活が生きており、つねに「これなお師教の恩致なり」といふような態度で、現実社会に対処しておられるが、それからして、僕らも、今まで学んできたものが本当に生きたものであったかどうか、よほどはつきりさせてゆかんとだめですね。

広沢 そういう意味では、先日二三人の人に提案していたのだが、今後、少なくとも年に一度は、先生を招いて、皆んなで研修会のようなものを持つようにしなければならぬと思う。でないと、時代に流されるか、一人よがりになってしまうからね。

竹園 それはいいことですね。僕も是非その仲間に入れてください。学校に残る人を中心にしていけば連絡もつきましますね。

広沢 とにかく、僕らが田舎へ帰るといふことは、今まで学んだことがどれだけ現実で確められていくか、確めていくことができるかということだろう。その意味では、具体的な生活の根底として、その力となり、その方向を正しくしていくというところに、親鸞に学んでいくということがあるのだから。

だから、それを互いに確め合う意味でも、研修会というか、皆んなが集まる場が必要だと思う。

松井 結局、わたしたちの課題は、これからの生き方が、日常的な生活の方向をひるがえすエネルギー源として、親鸞の精神を聞き聞いていくということにあるのですね。そこに、なにもものにも比べられない本当の自信というか、生甲斐が生まれるということなのでしょう。また夏休みに集まった時にさきほどからの話しを再確認していきたいと思えます。では、今日はいろいろありがとうございました。

本稿は、さる昭和三十三年三月、大谷大学大学院修士課程および文学部の卒業生有志による座談会の記録である。